エッセー

自然が育む力

冒険プログラムの可能性

さまざまな学びの形

香美町村岡区川会の長楽寺の近くに、高さ70メートル近い長楽寺橋があります。先日この橋で地元の県立村岡高の生徒がアブセイリングという懸垂下降のプログラムを体験しました。

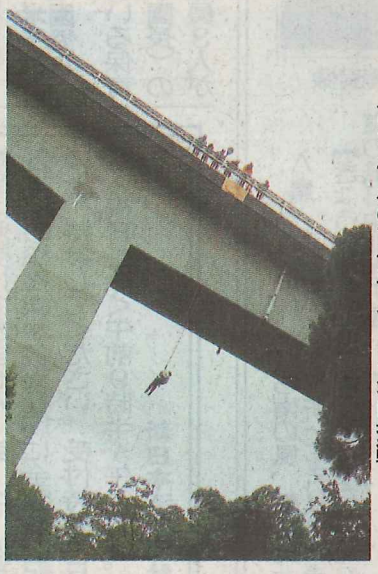
橋の欄干から地面まで高さ45メートルの所に登山用のロープを設置し、一人一人エイトカンという用具を使用して下降します。ビルの6、7階の高さから降りるのです。そう説明すると、無謀で乱暴なプログラムを子どもたちに体験させていると思う人もいるでしょう。

冒険プログラムの体験は、実に多くの効果を生み出しています。今回も事前にロープや器具の使用法、想定される危険について、子どもたち自身が真剣に体を使って学びます。そして自分一人では不安や怖さがあっても、仲間が一緒にいれば安心できるという、ごく人間社会では当たり前のことを頭ではなく、体で感じることができるのです。

支え合いながら欄干を乗り越える高校生

プログラムの本番は高さに足がすくみますが、橋の欄干を乗り越えるときに、仲間が握ってくれている1本のロープの心強さ、寄り添って声を掛けてくれる言葉の温かさを忘れることはないでしょう。

現代の生活にあっては、どうしても映像や知識といった実体験が伴わない学びが多くなります。実体験が伴っていないので、どんなことでも人ごとと感じることが多くなりました。子どもたちに何か伝えようとするときに多く聞く言葉は「そんなこと知っている」「言われなくても分かっている」。そう、頭では誰でも分かっているのです。



高さ45メートルのアブセイリングに挑戦

私は次世代を担う子どもたちに話す言葉の本当の意味を、行動一つ一つに自発的な動機をいつも持ってほしいと考えています。学びにはいろんな形がありますが、体を使って感じたことは何歳になっても忘れません。

体験が次の学びへの意欲と勇気に結び付いてこそ、冒険プログラムの意味があると考えています。

今回体験してくれた高校生に伝えたい。「すごいことを、誰もができないことを体験し成し遂げたのです。自分に自信を持ちなさい」と。

（尼崎市立美方高原自然の家所長　田中誉人）